

本一冊で事足りる
異世界流浪物語

8

YUKI KARAKU
結城絡繰

主な登場人物

偽神の意志

帝都最下層に存在しているという
呪いの権化。

ミササギ・リョウ

異世界に転生した読書好きな高校生。
万物を具現化できる「無限召喚本」を手に、
世界中に散らばった〈神製の本〉を
回収する旅に出る。

リンネ

帝国が抱える三人の勇者の一人。
完全支援型の珍しい能力を操る。

アシュリー

帝国が抱える三人の勇者の一人。
全てを視透かす強力な所有能力を持つ。

トクメー

ミササギが〈擬態〉によって
変身した女性の姿。

神様

神様の異世界での姿。
いつも唐突に出現し、ミササギに
余計な(?) アドバイスを与える。

トエル・ルディソーナ

エルフと獣人のハーフの美女。
魔物に捕らわれていたところを
ミササギに救われる。

アルバート・ラウーヤ

数えきれないスキルと称号を
持つ歴戦の戦士。

1 地下の作業風景

物に埋め尽くされた部屋。巨大な長机は山積みとなった書物によって占領され、そこかしこに置かれた武器や道具が床を隠している。

お世辞にも整理整頓がなされているとはいえない。^{がた}

そんな部屋の片隅で、「^{ぎしん}偽神の^{けんのう}権能」を継承し「不死の^{けつとうだん}血統団」の団長となった俺、ミササギは一人の団員の報告に耳を傾けていた。

「状況は？」

「はいっ、帝国に忍び込ませた諜報部隊によると、我々のアジトに攻め込もうという作戦決行日に変更はないようです。ただ、妙な策を^{はか}謀ろうとしているとのこと、現在はそちらの解明を優先しております」

「調査を続ける」

俺の言葉を受けた団員は、返事すら忘れて逃げるように退室した。何をそこまで慌てる必要があるのだろう。もう少し冷静に行動してくれないと、こちらとしても安心して仕事を任せられない。

そう思って頭を掻いて苦笑しつつ、渡された資料に目を走らせる。

帝国軍の規模はおよそ四万。ただしこれは城や町の警備だけを担当している者も含めた数なので、実際に俺の討伐に参戦する人員はもっと少ない。だからと言って油断できるわけもなく、そこに各地の貴族の私兵や有志の冒険者が加わる。

対して、不死の血統団の戦闘員は、あちこちから掻き集めたとしても七百を超えるかどうか。団員が所有する奴隷を数に入れたとしても、人数的な劣勢は崩せそうにない。

読み終えた資料を机の端にだけ、ゆっくりと天井を仰ぐ。^{あおむ}

（馬鹿正直にぶつかれば間違いなく死ぬだろうな……）

聖堂で俺が演説してから早五日。俺は迫る戦いに向けて準備を行っていた。

勇者率いる帝国軍を退け、偽神の片割れである「偽神の意志」を排除する。

俺は不死の血統団を使ってこれら二つを同時進行でこなさなくてはならない。はっきり言って、かなり無茶で困難な目標だ。

まともな策を練ったところで無様に失敗するオチが見える。

だからこそ、俺は考えた。敵対者たちを確実に虐殺する方法を。

外道^{げど}だろうが何だろうが勝てばそれで構わない。つまらないプライドに縛られて死ぬくらいなら、畜生^{ちくしやう}に成り果てても生き残る道を俺は選ぶ。

濃密に漂う死の気配すら楽しめるようになれば。

鼻歌交じりに椅子から立ち上がり、薄笑いを浮かべる。

「よし、ちよつと様子を見に行こうか」

壁のフックに掛けていたロングコートを羽織って部屋を後にする。

生産系の能力を持つ団員と奴隷には、戦いに備えて必要な物を作製させていた。それらは細々と^{こまごま}した各種薬品から始まり、大量殺戮^{さうりく}を行うための戦術兵器まで多岐^{わた}に亘る。寝る間も惜しんで作業に没頭する彼らは、ここ数日だけでいくつかの道具を開発していた。

俺は今からその進行具合を確認しに行くのだ。そして、場合によっては個別で改善の指示を出し、手が空いた者には新たな命令を下す。ここで躓^{つまず}けば後の全ての策が台無しとなるので、毎日のチェックには余念がないようにしていた。

何ができているか楽しみにしながら、俺は作業部屋へと向かう。

広々とした室内は喧噪^{けんそう}に包まれ、人々が忙しそうに走り回る。あちこちで金属音が鳴り響き、部屋全体に熱気が漂っていた。

そんな見ているだけで暑苦しい光景に、俺は少しだけ辟易^{へきえき}する。

ここでは主に兵器が開発されており、敵を一網打尽にする罫や広範囲を攻撃可能な武器、団員に支給される装備等が造られていた。

汗水垂らして四苦八苦する彼らに、俺は密かに期待の眼差しを送る。

「ふむ、誰かと思ったら少年じゃないか」

作業の邪魔をしないよう静かに見回りをしていると、背後から声を掛けられた。この落ち着いた声音には聞き覚えがあり、現在トクメーという女性の姿をしている俺を少年呼ばわりするのは彼女しかない。

そこに立っていたのはジュリアさんだった。奇妙な縁で仲間に引き入れて早々、このような状況にまで巻き込んでしまっている。

ちなみに現在、彼女には兵器開発を主導してもらっていた。研究者気質のジュリアさんは、過去にも独学で様々なモノを生み出している。幹部の大半を失った血統団にとって、こういった人材は貴重だ。改めて仲間に引き込めたことを幸運に思うよ。

俺は軽く手を上げて応対する。

「どうもどうも。調子はどうですかね」

「おかげさまで上々だよ。やはり私には地下での生活が性に合っているらしい。それよりもこれを見てほしい。新しい武器が完成したのだよ」

ジュリアさんは自信満々に胸を張りながら、俺に武器を手渡してくる。

それは、白鞘に収められた一振りの脇差だった。柄を握ってゆっくりと抜刀する。銀色の刃は濡れているかのように淡く煌めき、僅かな抵抗すら見せずに鞘から姿を現した。

魔力とは異なるエネルギーを感じる。どうやらただの武器ではないらしい。何かしらの細工が為

されているのだろう。

俺が疑問に思っているのを察したのか、ジュリアさんが誇らしげに解説してくれる。

「耐久性と切れ味の性能を底上げしてみたよ。さらに刀身に意思のない精霊を封じ込めた。大抵の魔法なら切断できる上、実体を持たない存在にも攻撃が当たる。そこらの魔法武器とは比べ物にならない活躍が期待できるはずだ」

「なるほどー。いいですね」

正直、戦いで使うには十分すぎるスペックである。

抜き身の脇差を白鞘に戻し、ジュリアさんに笑いかける。

「素晴らしいです。予想以上の出来栄ですよ。ああ、よかったら試用に付き合ってもらえませんか？」

せっかくなのでどの程度の切れ味なのか試してみたい。心優しいジュリアさんならきつと乗ってくるはずだ。

そう思っていたのだが、ジュリアさんは神妙な面持ちで尋ねてきた。

「……試用ということは、それを私に振るうということかね？」

「もちろんですよ。何事も実践が大事ですから」

戦いにおいて道具の選定は極めて重要な作業の一つである。それを疎かにするのはご法度というものだ。今更何を言っているのだろう。

俺は脇差を腰に吊るして思案する。

「今日はどの場所が空いてたかなあ……」

「おおっと！ 大事な用件を思い出してしまったよ！ 少年には悪いが他の団員を当たってもらおうか。そうそう、アンネ嬢辺りなら大丈夫じゃあないかな。では、さらばだっ！」

ジュリアさんは色々うまくし立てた末に、どこかへ走り去ってしまった。その颯爽とした動きは、戦闘時にもなかなか見せない俊敏さだった。まったく、ちよっとくらい手伝ってくれてもいいのに。仕方ない、他の人間に手伝ってもらおうか。俺は先ほどからこちらを窺っていた周囲の団員たちに視線を向ける。

「……なあ」

妙に気まずい沈黙。

俺に発言を求められていると気付いた彼らは、一斉に各々の仕事に戻った。なんだか数秒前よりも作業の手つきが速いのは、俺の気のせいではないはずだ。

よく分からないが、俺がここにいると緊張させてしまうのかもしれない。それならあんまり長居すると迷惑だな。

そう考えた俺は肩を竦め、ロングコートを揺らしながら作業部屋を出た。



「へえ、本当によく斬れるね……」

何度も頷きつつ、しげしげと脇差を観察する。想定以上の出来栄えに文句はなかった。これだけ有用なら、実戦でもその性能を遺憾なく発揮できそうだ。

鼻歌交じりに血の滴る脇差を軽く振る。

眼前には凄惨な光景が広がっていた。力無く倒れる団員たちは一人残らず事切れており、五体満足な者を探す方が難しい有様である。尤も、彼らは不死なので、このまま放置しておけばいずれ復活するだろう。

脇差の刃を布で拭ってから鞘に戻す。

（つたく、団員たちがどれだけ強くなっているか見たかったのに……）

腰に手を当てて大きな溜息を吐く。俺に手傷を負わせるくらいの気概を見せてほしかったね。

無様な姿を晒してはいるが、彼らは団員の中でも戦闘訓練ばかりさせていた者たちの集まりである。少々の炎や雷、不可視の重力くらいで怯まないでほしい。本番では今回よりも遥かに過酷な状況で戦ってもらおうのだから。

脇差でコツコツと自分の肩を叩き、静かに含み笑いをする。

「偽神サマー、お食事の準備ができたから早く……って、これまたすごいことになってるわねえ。掃除するのって結構大変なのよ？」

後方の出入り口から能天気な声が聞こえてきた。

振り向けば、赤いワンピースに身を包んだ美女——血統団幹部のアンネが、俺をジト目で見つめている。

居心地の悪い視線を堂々と受け止め、俺は肩を竦めてみせる。

「これだけ血を撒き散らしてやられる方が悪い。そんなことより食事の方が大切だよ。君が持ってきた情報を知りたいし、一緒に行こうか」

アンネには帝国側の情報収集を依頼していた。

鞭を片手に持った彼女は、団員たちの死体を「瞥（いちめつ）してから渋々といった様子でついてきた。実はこのやり取りも恒例なので、互いに慣れた動作で食堂へと向かう。

「勇者について何か分かったか？」

道中で気になっていたことをアンネに尋ねた。

この国には異界から召喚された三人の勇者が存在する。帝国側の戦力を探る上で、圧倒的戦闘力を誇る彼らの情報は欠かせない。

アンネは苦い顔をして答える。

「それが結構ヤバそうなのよねえ。宝物庫にある歴代勇者の装備を持ち出すらしいから、団員たちだけでは足止めすらできないと思うの。おまけに肝心の勇者たちの能力がすぐく面倒で……」

それからアンネの話は愚痴（ぐち）のように続いた。一通りの内容を聞いた俺の反応は、悪態（あくた）と露骨な舌

打ちだった。

俺が把握しているのは、三人中二人の勇者である。絶対的な観察眼を持つ女勇者ことアシュリーさんと、金の力を操るハーレム勇者ことレイ。どちらも反則的な力を有していたことは記憶に新しい。

そして、ここにもう一人同格の奴が加わるのだ。装備を固めた三人の勇者が一挙に攻め込んでくれば、幹部レベルでも太刀打ちできないのは必至。下手すれば、俺でも苦戦を強いられるかもしれない。

——尤も、負けるつもりは一切ないが。

俺も彼らと同じ勇者であり、災厄を巻き起こす偽神。情報量や地形的なアドバンテージを考慮すれば、必ずしもこちらが不利なわけでもない。

「とにかく、三人目の奴は確実に殺さないとな……」

アンネの話を聞いたところ、まだ見ぬ勇者も相当に厄介な能力持ちらしい。一言で評するならば、後方支援タイプだ。他の二人と違って単体としての戦闘能力では劣るものの、決して無視はできない。

「物騒なことを言う時の偽神サマって、すごくいい笑顔よね」

アンネは呆れた表情で苦笑する。

半ばおどけた調子のアンネに、俺は笑うしかなかった。



「全体の動きはどうなっているのかな？」

「はい、どこも偽神様の分身の御力によって着々と進行しております。この調子なら帝国軍とも互角以上に渡り合えるかと」

「油断と慢心は禁物だけどね。明日から一通り視察するよ」

「二人とも、食事の時間くらい楽しんだら……？」

幹部以上の団員だけが使用を許された食堂。

そこで偶然食事をとっていた神父服の美女ことサラを交え、俺とアンネは食事の時間を過ごしていた。

ちなみにサラの言った「分身」とは、偽神の権能の一つである。錯に権能と魔力を注ぎ込み、自分と同じ姿の存在を生み出すのだ。現在の不死の血統団では、この能力で量産された別の「俺」があちこちで指示を行っていた。

個々の細かな性格の違いや、所有能力ユウリキネキルが使えないという弱点はあるが、俺に掛かる負担が劇的に

減るのでかなり重宝している。

その中でも、俺が個人的に気になっている分身は七名。

戦いとスリルばかりを求める「戦闘狂」。

内向的な性格で、近距離戦闘を非効率的だと嫌う「狙撃者」。

普段は割と温厚だが、怒ると殺意に染まる「アングリー」。

部下の育成能力以外は大した取り柄もない「ハニーシュガー」。

狡猾な性格で油断ならない「ダートマン」。

ネタ武器ばかりを愛用するイカれた「フアニークラウン」。

二丁拳銃を用いた近接格闘を好む、西部劇かぶれの「マークスマン」。

他にも個性的な分身がいるものの、特に逸脱しているのはこいつらだ。

一人の例外を除けば、戦闘能力が高い者ばかりである。勇者クラスと遭遇しない限り、そう簡単にくたばりはしないだろう。

アンネはステーキを口に運んだ後、思い出したように手を打った。

「あ、そうそう。偽神サマの分身をちょこっと貸してくれない？ 偵察能力のある団員が足りないのよね」



軽い調子でお願いしてくるアンネ。ノリが小遣いをせびる高校生だよ。

その姿に苦笑しながら、俺はナイフを持つ手をひらひらと振った。

「んー、分かった。三人くらいそっちに回すよ。ただし、相応の成果が出なかったら今度の武器の実験台にするからな？」

「さっすが偽神サマ！ 任せといて、絶対に有益な情報を持つてくるわ。それじゃあ、私はもう食べ終わったから、さっそく行ってくるわねー」

そう言うと、アンネは上機嫌な様子で食堂から出ていった。あんな感じでもなんだかんだで情報収集能力は高いので、彼女の帰還を心待ちにしておこう。

俺は口笛交じりにステーキを切り分け、気分よく頬張った。

「偽神様にあのような口の利き方を……申し訳ありません、アンネは後ほど強く叱っておきますので」

「いや、別にあれくらいいいさ。気にしたら負けだよ」

ピリピリとした雰囲気放つサラをさりげなく宥める。そこまで腹を立てることではないと思うし、それに、俺に対するアンネの態度は今に始まったことではない。

俺の言葉を受けて、サラは剣呑なオーラをあつさりと引つ込めてくれた。こういうところは従順で非常に助かる。

その後は何事もなく食事が終わった。今日は早急にすべき仕事は済ましていたので、食堂の一角

を占領して読書に耽る。こうして気晴らしと同時に知識を蓄えているのだ。楽しみながら自分のためになるとは素晴らしい。

肘をついて本を眺めていると、隣に座るサラが声を掛けてきた。

「ところで、偽神様はこの後のご予定はあるでしょうか」

「いや、特にないけど。何か用事でもあった？」

俺の把握している限りでは、直接判断を下さなければならぬことはなかったはずだ。

脳内のスケジュールを振り返る俺をよそに、サラが静かに答えた。

「はい、もし偽神様が受けてくださるのであれば、手合せ願いたいと思ひまして。最近の偽神様は、戦いに少々物足りなさを感じていらつしやうたようですからね」

「……本気か？」

読書の手を止め、サラに視線を移す。不敵に微笑む彼女の瞳は、どこか挑戦的だった。

「あなた様を相手にこのような冗談は言いません」

そう返してきたサラの言葉に、嘘偽りがないことを確信する。

俺は一つ溜息を吐き、椅子から立ち上がった。

（勝手に非戦闘員だと決めつけていたが……）

改めて考えれば、目の前にいる美女は自分が戦えないと明言したことは一度もない。戦闘訓練にも参加していなかったので、参謀的な役割だと思っていたがそうではないのかもしれない。

自身の早とちりに舌打ちをし、サラの肩を軽く叩く。

「そういうことなら、すぐにでも戦おうか。ただし、手加減は一切しない。殺すつもりでいくから、覚悟はしておけよ」

「かしこまりました」

サラは俺の殺気にも臆せずに淡々と頭を下げた。武闘派の幹部連中でさえ、多少は怯えるというのに。これはなかなか面白いな。

拳を握り締めながら、無意識のうちに含み笑いをする。

——見せてもらおうか、謎多き副団長の実力を。

2 傍らの強者

「本当に遠慮なく戦ってもいいのか？」

「もちろんです。そうでなければ偽神様のお役に立てませんから。権能の力を高めるためにも全力で来てください」

何もない広々とした空間の中央で、俺はサラと対峙する。

ここは新作兵器の性能実験をするための区画だ。平常時は邪魔な物を一切置いておらず、部屋そのものの耐久度も申し分ない。

ここなら思う存分に力を発揮できるというわけである。

「行くぞ」

「いつでもどうぞ」

手に取ったナイフの切っ先をサラに向けた。

俺の挑発的な行動に、彼女は顎に手を当てて優雅に微笑む。この期に及んでも余裕の態度を崩さない辺り、さすがだと思ふね。

無手で悠然と立つサラに感心しながら、俺は〈縮地〉で接近した。

「へえ……」

瞬時に距離を詰めてもサラは動揺を見せない。

俺がナイフを振り上げると、彼女はこちらに向かって手をかざした。そこから感じる魔力の動きに、微かな脅威を覚える。

（魔法か？ だけど、この距離だと詠唱が間に合わないな）

サラの行動を怪訝に思いつつも、俺は彼女の首目掛けてナイフを——

「甘いですよ」

「——っ!？」

刃が届く寸前、全身に強烈な衝撃が走って後方に吹き飛ばされる。足が浮かってしまったために、強引に踏ん張ることも叶わない。

激しく揺れる視界。直後に鳴り響く爆発音。

俺は突然の出来事に為す術もなく、そのまま無防備な状態で壁に激突した。常人ならこれでミートペーストになるほどの衝撃だが、権能の保護によってノーダメージだ。寧ろ壁の損害の方が圧倒的に大きい。

崩れる瓦礫から這い出て、ロングコートの汚れを払い落とす。

「ふむ、なかなか面白いな。詠唱なしの魔法か？」

あのタイミングでカウンターを受けるとは思わなかった。そもそもこちらの初撃を完全に見切っていたこと自体、かなり驚愕である。

俺の疑問に対して、サラは淀みなく答えた。

「いいえ、今のは私の特異体質が生み出した力です。体外へと発した魔力が斥力に変換され、それが偽神様の攻撃を防ぎました」

引力の対になる概念。互いを遠ざけようとする力が斥力である。

どうやら彼女は、そんな代物を自由に扱えるらしい。

今のように強力な斥力を相手に触れずに使えるのなら、あれだけの余裕にも納得できる。

「随分と反則じみているな……」

「それほど便利なものでもありません。この性質のせいで私は、魔力を伴う一切の技能が使えませんから。斥力の発現は一見すると魅力的かもしれませんが、実際はただの障害ですね」

自嘲気味にそう言い終えたサラは俯く。確かに魔力の使い道が一つに狭められるのはきついだろうからな。彼女が憂いを見せる気持ちも幾分かは理解できる。

俺は取り出した拳銃を構え、サラの目を見つめた。

「それがどうした。障害だろうが何だろうが利用すればいい。それは、俺なんかよりも自分で一番分かっているんだろう？ ほら、殺し合いの途中なんだ。さっさとかかってこいよ」

「——申し訳ありません、私としたことが気を抜いておりました。ここからは遠慮なくいかせてもらいます」

俺の言葉に笑顔で応えたサラは、濃密な殺意を発散する。

肌に触れる空気が痛い。久しく忘れていた死の気配を感じた。

サラが一步踏みだし、静かに語りだす。

「偽神様にはお伝えしておりませんでした。それでも私は上級魔族の端くれ。以前は〈拒絶神官〉とも呼ばれておりまして……今回はその力を存分に発揮して、あなた様のお役に立ちましょう」
割と重要な情報をさらりとカミングアウトされてしまった。魔族だったとは。まあ、追及は後でいくらでもできることだし、今は放置しておくか。

やる気を取り戻した……というより、先ほどとは比べ物にならないレベルの戦意を漲みなぎらせたサラを見て、俺は拳銃の引き金に指を掛けた。

（こんなことなら、もう少し武器を携帯しとけばよかったなあ……）

激戦を予感しながら、内心でほんの少しだけ後悔する。

しかし、悠長に準備をしている暇はなさそうだ。

前方で笑う美女は、既に疾走を開始しようとしているのだから。



俺とサラによる戦闘は次第に熾し烈さを増し、最終的に互いがその場から動けなくなるまで繰り広げられた。

まさか、権能の保護を受けたこの肉体で引き分けるとは。全力ではなかったにしろ、彼女一人にここまでしてやられるとは情けない。

（何が障害だよ……さつき落ち込んだように見せていたのは絶対演技だったね）

廃墟同然に成り果てた部屋の惨状を見渡しつつ、内心で愚痴る。

正直、サラの斥力は、俺の想像を超えていた。

こちらが殴ろうとすれば華麗に受け流され、スキルや銃撃で攻めれば弾かれ、隙を見れば容赦

なく痛打を与えてくる。

（胸に掌底しょうていを食らった時は死ぬかと思ったなあ……）

サラは体術に斥力を織り交ぜた独自の戦法を使ってきた。

無敵に近い防御力を誇る権能の保護だが、身体の内側への衝撃の耐性は弱いようで、身体を内側からぶつ壊されたよ。〈再生〉がなければ吐血が止まらなかったと思う。

他にも、斥力を利用した投げ技や関節技といった、こちらの虚を突く攻撃に見事なまでに踊らされた。

彼女曰く、「数代前の偽神様からお仕えしていますから、この程度の権能の知識は当然のことです」だそうだ。

□元を汚す血を拭い取り、ひび割れた壁にもたれかかる。

「それで、俺の戦いぶりはどうだった？ 偽神の意志には勝てそうかな」

大きく伸びをしながら、俺は隣に佇たすむサラに問いかけた。

彼女も俺の猛攻によって負傷しているはずだが、現在は服装まで正してピンピンしている。上級魔族とやらの再生能力は伊達だではないらしい。

そんな彼女は、俺の疑問に淡々と言葉を返した。

「誠に申し上げにくいのですが、今の偽神様では到底太刀打ちできないでしょう。相対したとしても、何の抵抗もできずに殺されるかと」

それは頭の片隅で燻^{くすぶ}っていた残酷な答え。これまでの知識と経験から、俺も導き出していた結論だった。

あっけなく倒せるのなら、歴代の偽神がどうにかしているだろう。

「なるほど、ね……」

ぽつりと眩^{くら}き、足元に落ちていた小石を拾う。

手のひらの上で転がるそれは、黒い錆^{さび}となつて音もなく崩れた。

3 侵入者は闇より出^いでる

俺とサラは、諜報活動から帰還したアンネの報告を聞いていた。

眠気覚ましにガムを噛みながら、長々と続く話を耳を傾ける。

「帝国軍は、大規模な付与魔法で三日三晩は不死の属性を得るらしいわ。魔法陣による発動だから、術者を殺したとしても効果は切れないから厄介よ」

そう言つてアンネは両手で机を叩く。

彼女の調査結果によると、帝国軍は〈不屈の戦士たち〉と呼ばれる魔法を切り札として使おうと

しているらしい。

その効果を端的に表現するならば、「無限蘇生」。一度その魔法を受ければ、たとえ死んだとしても魔法陣への強制転移を経て復活できる。

仕組みはまったく以て理解不能だが、随分とぶつとんだ性能である。

(まるでRPGゲームの主人公……いや、これはゾンビアタックだな)

この魔法、確か以前読んだこの世界の戦記物で目にしたような気がする。微かな記憶を頼りにチート本をめぐつていくと、それらしき魔法を使った戦闘記録が見つかった。

時は約百七十年前。当時の帝国は、ある王国と戦争をしていた。

二国間の戦争は、帝国が終始優勢という形で繰り返^{くりか}えられた。書物の前後の文章から察するに、単純に国の規模に差があつたのだろう。

やがて王国の首都にまで攻め込んだ帝国軍は、ダメ押しとばかりに件の魔法を披露した。開発に成功したばかりのそれを実戦で試したかったのだと思われる。

とにかく、帝国の打った一手は王国に対して壊滅的な被害を与えた。何しろ、帝国の兵士は死を厭わずに特攻でき、殺されれば魔法陣の敷かれた安全地帯から再スタートできるので。

(うわ、これはなかなか残酷だねえ)

こうして決して減らない物量で押し切った帝国軍は、その王国を吸収した。そして、その魔法は今に受け継がれ、帝国の奥の手として秘匿^{ひそく}されてきたそう。

（そんな代物が俺たちとの戦いで使われるってわけか……）

帝国への具体的な対策を議論するサラとアンネを尻目に、俺は思考に没頭する。

思えば、帝国の武闘大会の予選でも似たような魔法があった。あれは確か一度だけ死を回避できる効果を持っていたはず。

ただ、今回のそれは復活回数に制限はなく、三日間は効力が消えないという。

まったく、俺みたいな善良な人間相手に酷い真似をするものだ。

自分の不幸さを嘆きつつ、弄（もてあそ）んでいたナイフを机に突き立てる。

木端が飛び散り、サラとアンネがこちらを向いた。

「えっとお、偽神サマ？」

「情報提供、ご苦労。帝国軍に関してはだいたい分かったよ」

そして俺は、思いついた作戦案を二人に告げた。

これを円滑に進められれば、不死の血統団の一人勝ちで事は終結する。

「さすがにそれは卑怯というか、滅茶苦茶すぎないかしら……」

「私は大変素晴らしい合理的な戦い方だと思います」

あまりの非道さにドン引きするアンネに対し、手放しで称賛するサラ。二人ともいいリアクションをしてくれたので、俺としては嬉しい限りである。

「そういうわけで、詳しいことは明日にでも話そうか。じゃあ、今日は解散」

席を立てただけ言い終えてから、俺は部屋を後にした。

思いついた未来を実現するためにも、さっそく現状の戦力を把握しなければ。

不死身になった程度の兵士に負けているようでは話にならない。

何といっても、こちらの陣営だって不死の軍団なのだから。



暗闇と静寂が沈澱する石畳の通路。

点々と設置された松明（たいまつ）の明かりが周囲を照らしている。

どことなく緊張した雰囲気（たいまつ）が漂うのは、場所が場所だからだろうか。適度なスリルが妙に心地よい。

目の前を通過した巡回兵を眺めつつ、そんなことを考える。

（さて、迂回しながら進むか……）

楽々と進めるほど警備は甘くないらしい。

巡回兵がいなくなったところで〈不可視化〉を解除し、額の汗を拭う。

現在、俺は帝都の城に潜入していた。

アンネが言っていた魔法陣の確認以外にも、個人的に調べたいことがあったからだ。やはり氣に

なるものは実際に目で見ておかなければ。ここはさすがに譲れないということで、団員たちのやりとりとした制止を振り切って今に至る。

まあ、自分の命を狙う勢力の本拠地に忍び込むなんて正気の沙汰^{さた}じゃないからな。団員たちの気持ちも理解できるが、時には相応のリスクを覚悟しなければいけない局面もある。

危険を恐れてばかりでは前に進むことができないからね。

そんなことを考えながら、ナイフを片手に城内を歩く。

（はあ、早く外の空気が吸いたいね……）

地下空間から直接潜入しているので、ずっと屋外には出ていない。まだ地下にいるせいなのか、どこか陰鬱^{いんうつ}で空気も湿っぽく感じる。

もう少し上の階層は城らしく整備されているようなので、さつさと用事を済ませて深呼吸をしに行きたい。

苔^{こけ}の生えた石壁を横目に、俺は溜息を吐く。

『偽神サマ、そこを右に曲がれば地下蔵書庫よ。禁書庫ほど警備は厳重ではないけれど、畏^{おそ}がいくつか仕掛けられているから注意して』

耳に装着した通信機からアンネの声が聞こえてくる。

これは今回の任務のために俺が用意したもので、アンネには特殊な魔法で俺の現在位置を捕捉してもらい、血統団のアジトからリアルタイムでナビゲートするよう指示していた。

仕様上、こちらの通信機は受信専用なので具体的なやり取りはできないが、彼女が知っている情報をその都度提供してもらえるのはありがたい。

アンネの言葉に従って右に曲がり、こそこそと蔵書庫へと近付く。

「へえ……」

室内は完全に真っ暗で、所々に警報型の魔法道具が設置されていた。夜間はこうして侵入者の警戒を怠らないようにしているのだろう。

もちろん〈暗視^{あんし}〉や〈畏探知〉、〈畏解除〉といったスキルを持つ俺の前では、これらの工夫も時間稼ぎ程度にしかない。

邪魔な畏だけを無効化しつつ、適当な書物を拝借していく。残念ながらそこまで価値のあるものは手に入らなかったが、今後の活動で役には立ちそうなのでよしとする。

さっそくの収穫に胸を躍らせながら、蔵書庫を出た。

（さて、次はどこに行こうかな）

事前情報からある程度の目星は付けてあるので、あとは調査する順番だ。特に警備が厳重で諜報部隊が手を付けられなかった箇所は、是非ともチェックしたい。

（おっと、ようやく地上に出たか……）

巡回兵を避けつつ移動しているうちに、窓のある階層に到達した。

外には深い夜空が広がっている。偽神の権能を得た今の肉体は日光が毒となってしまうので助

かった。これで探索範囲をさらに拡大できるな。日の出の時間にさえ注意しておけば、危険もないはずだ。

月光の差し込む廊下を、音を立てずに疾走する。

「っ!？」

誰もいないはずの廊下で、何かが煌めく。

瞬時に危険を察知した俺は、足を止めて目を凝らした。

よく見れば、通行を妨げるような形でガラスみたいな壁があることに気付く。

（何だこれ。魔力も感じるようだけど……）

そこまで考えたところで、背後から静かな足音が響いてきた。

今日は単独でここまで来たのだから、帝都の城の中に俺の味方なんていない。無様に発見される前にすると壁をよじ登り、天井に張り付いて息を潜める。

「……………」

しばらくすると、一人の兵士が俺のいる場所までやってきた。ただし頭上の俺の存在には気付いておらず、首を傾げて辺りを見回している。

そいつは一分ほど近くの通路をうろうろと徘徊した末に、ようやくどこかへ去っていった。きつと持ち場にも戻ったのだろう。

ひとまずのピンチを乗り切ったことに、少しだけ肩の力を抜いた。

『その階からは光属性の結界が張られている場所があるの。どうしても行けない場所が出てくると思うけど、大人しく諦めるのが無難ね』

アンネの警告に納得し、そっと床に飛び降りる。

あちらも一筋縄ではいかない罠を仕掛けているということか。

彼女の分かる範囲では、光の結界があるのは、皇帝とそ一族の私室へと続くエリア、城の尖塔の一つを丸ごと占領する禁書庫、勇者たちが使っている部屋、それと国の金庫と宝物庫だった。

また、その他の要所にも似たような仕掛けが施されている可能性もあるので油断はできないとのこと。

俺を含めた不死の血統団は、光の結界を通過できない。

仕方ないので、できることから済ませていくことにする。

早足で廊下を走るメイドをやり過ごしてから再び動き出した。

まだまだ夜は長い。焦らずじつくりと行こう。

その後も俺は精力的に城内の探索をし、気が付けば侵入開始から二時間が経過していた。

引用したデジタルカメラで作戦草案や軍の詳細な規模、使用される兵器の種類といった資料までバッチリ記録できたので大満足である。

（はあ、さすがに疲れたなあ……）

白い壁にもたれつつ、若干の疲労に息を吐く。

現在は、城のとある一室を勝手に使わせてもらい休憩していた。

放置されたガラクタ置き場らしく、埃の溜まった家具があちこちに捨てられている。ここなら俺が多少居座ったところで見つかりはしないはずだ。

炭酸ジュースの缶を片手に、窓の外に目を向ける。

（さて、最後の目標もサクッとこなしますか）

それは、件の魔法陣の確認である。

眼下には平坦な土地が広がっていた。

そして、そのスケールはとんでもないものだった。俺のいる部屋の位置から確認できるだけでも、サッカーコート数個分の面積があるのではないだろうか。アンネからの情報で城の裏庭が大規模な訓練場になっているとは聞いていたが、まさかこれほどまでとは。

懐からデジタルカメラを取り出し、見えるものを撮影していく。

裏庭の敷地いっぱいを利用して地面に描かれているのは、作製途中の魔法陣だろう。仄かに紫色の光を発するそれは、複雑な模様の集まりで構築されていた。

中庭の各所で何やら作業をしているのは魔術師系の人間だと思う。この離れた距離からでも分かるくらいに苦悶の表情を浮かべて、魔法陣作りに没頭している。

少し視野を広げれば、金属製の特殊な破城槌や分解された大型弩砲といった不死の血統団のア

ジト攻略用と思しき兵器が目に入った。

戦いが始まれば、あれらを運用して俺たちを殺しに来るのだろう。

「ははっ……笑えるね」

少し前の記憶を遡り、帝国側の作戦を思い出す。

集結させた軍隊をあの大がかりな魔法陣で一気に不死化、そこから地下へと続く複数のルートで偽神討伐だったつけ。

この裏庭を埋め尽くすほどの勢力となると、さすがに身震いしそうになった。

改めて討伐対象となっている自分自身の立場を認識し、無意識のうちに苦笑する。

（おっと、正義のヒーローの登場かな）

裏庭の隅に佇む一人の人物を発見し、おどけた調子で口笛を吹く。

腰に剣を提げる彼女は、腕組みをしてその場を静観していた。一見するとリラックスしているようにも思える姿だが、神経を尖らせて常に警戒を怠っていない。自分たちの本拠地でも一切気を抜かない辺り、さすがと言うべきか。

視線の先の彼女——勇者アシュリーに、俺は密かに称賛を送った。

帝都に魔族が襲撃してきた際に彼女と共闘したのも今では良い思い出だ。あの雰囲気だと、当時よりさらに実力が上がっているのではないだろうか。よくもまあ、この短期間で強くなったものである。

さすが国を守る勇者、主人公補正でも持っているのかもしれない。

「……ん？」

アシュリーさんが唐突にこちらを向いた。

彼女のことばかりを考えていたせいだろうか。

何の反応も返さないのは寂しいので、軽く手を振ってみた。

「フフッ、喜んでるねー」

やっぱり俺の存在に気付いていたらしい。この距離でよく分かったものだ。トクメーとしての外見も、彼女の持つ何でも見破る所有能力（インクスキル）で暴いたのかな。

彼女の瞳から、驚愕や困惑、葛藤が見て取れる。

そりゃ驚くよね、我ながら突っ込みどころが多すぎることになっているし。

自嘲気味に笑っていると、アシュリーさんがパクパクと口を動かしたので、何と言ったのか読み取ってみる。

「ミ・サ・ど・う・し・て、かあ……」

そこに様々な思いが込められているのは容易に理解できた。

いや、あの感じだと直接にでも聞きに來そうだな。

もちろん彼女の疑問に答える義務なんてこれっぽっちもない。

俺の方へ向かおうとしているアシュリーさんにウィンクし、さっさとガラクタ部屋を後にした。

悠長に寛いでいたら、彼女に遭遇しそうだからね。

廊下で〈不可視化〉を発動してから地下を目指して走りだす。

気分はまるで怪盜のよう。まあ、俺にヒーローは似合わないもんな。

（いやあ、本格的に楽しくなってきたね……）

誰もいない階段を跳び下りながらふと思う。

有益な情報を手に入れ、潜入ミッションの適度な刺激を堪能し、敵側のリーダーである勇者にある意味宣戦布告もした。個人的には非常に有意義な夜だった。

帰還したらさっそく作戦の修正を行おう。善は急げだ。

上の階で誰かが走り回るのを耳にしながら、俺は地下に戻った。

4 死の無き戦いへ

血と消毒液の臭いが鼻を突く。

俺は真っ赤なゴム手袋を外し、邪魔な手術台を蹴飛ばした。

床に落ちたメスが甲高い音を鳴らし、グロテスクな肉塊が派手にぶちまけられる。白を基調とし

た清潔な部屋は、瞬く間に赤黒く染まった。

しかし、それらは今の俺にとって些細なことだ。

汚れたエプロンを気分よく外し、ぐつと大きく伸びをする。

帝都の城から帰還した翌日。

俺は血塗れの実験室で小躍りしていた。

「フツッ、最高だね……」

団員が持つてきた報告書の内容に、思わず笑みが零れる。

どうやら帝国側の上層部に静かな混乱がもたらされているらしい。

勇者の一人が作戦の大幅な見直しを訴えているのだとか。ただ、軍部や貴族連中からの猛反対を受けているので、おそらくは意見を押し通せずに終わるとのこと。

アシュリーさんは俺の所有能力を知っているから、その危険性を主張しているに違いない。尤も、いくら正しい意見だからといって、戦争が数日後にまで迫ったタイミングで喜ばれる意見でないのは確かである。傲慢な貴族連中にしても、私兵の拘束時間が増えるのは嫌だろうし。

いやあ、味方同士で潰し合ってくれるとは随分と気が利くね。

ちなみに血統団の管理する地下空間にも何度が密偵が入り込んだが、その都度俺が殺害し、諸々の材料にしているから大丈夫である。先ほどの肉塊はそういうことだ。

（こんな物騒なご時世なんだから、防犯は徹底しないと）

コーヒーで喉を潤しつつ、読み終わった報告書を投げ捨てた。

俺も血統団の頭としてやらなければならないことがあるからね。敵対勢力が浮足立っていいようが関係ない。寧ろ、この絶好のチャンスを活かす必要がある。

脳内で今日の予定を立てていると、部屋の扉がノックされた。

気配で誰か分かったので入室を許可する。

「失礼するよ……って、これはまた酷い臭いだな」

「実験には苦勞が付きものですから。それより、例のモノは完成しましたか？」

非難じみた視線と文句を受け流して、こちらから質問を投げた。

彼女——ジュリアさんは胸を張って頷く。どうやらよほどの自信があるらしい。実はジュリアさんには、今回の作戦の要となるモノを造るよう依頼していた。

血濡れの部屋で立ち話というのもアレなので、清潔さの保たれた隣室へ移動する。

「助かりましたよ。今度の作戦で必要不可欠な要素だったもので」

手頃な椅子に腰かけたジュリアさんに、俺はウイスキーの瓶を差し出す。仕事を頑張ってくれたご褒美である。

豪快に酒瓶を呷ったジュリアさんは、満足そうな顔で髪を掻き上げた。妖艶な雰囲気に伴う動作と彼女の美貌が、実に色っぽさを醸し出している。

濡れた唇を手の甲で拭ったジュリアさんは、少し恨めしそうに言った。

「もっと早い段階で指示が欲しかったがね」

「できることならそうしていますよ。急遽決まったことだったんです」

俺は苦笑交じりの言い訳を返す。

諜報部隊からの報告や先日の潜入で獲得した情報。俺たち血統団が選択した作戦は、それらを考慮した上で考案されたのだ。いずれかの事情が少しでも違っていれば、もっと普通のやり方を選んでいたと思う。

俺の内心を察したのか、ジュリアさんは少し考え込んでから立ち上がった。

「別にこの程度の我儘は気にしないさ。君が気分屋なのは、今に始まったことではないからね。また用があれば言ってくれ」

彼女はそれだけ言い終えると足早に退室する。やはりなんだかんだで頼りになる人だ。

そんなジュリアさんの座っていた椅子には、九本の杭が残されていた。磨き込まれた表面には無数の模様が刻まれている。

これこそが俺の求めていたモノだ。

目に付いた一本を手に取り、しげしげと観察してみる。

「……んー、当日が楽しみだね」

念のためにスキルで効果を確認してみたが、俺の要望以上の出来栄えとなっているようだ。これなら問題なく運用できるに違いない。

込み上げる愉悅を隠さずに笑う。

照明を浴びて妖しく光る紫色の杭は、不思議な魅力を放っていた。

段ボールを抱えた団員が、忙しそうに走り回る。

見覚えある面々の中で新顔が目立った。別動隊に実行させていた人員補充は順調らしい。主に帝都の犯罪組織の構成員を魔術で隷属化したり、ギルドの優秀な冒険者を拉致して洗脳したりと非法的な手段で集めた人材である。

ただし少数派だが、自らの意思で俺たちと協力関係になった者もいた。前々から帝国に不信感を抱いていた者や、こちらの陣営に付いた方が有益と判断した者など動機は様々だ。

「おっ、あれは……」

無秩序に動く連中の中に懐かしい顔を見つける。エヴァという名の魔術師だ。褐色の肌に扇情的な赤いローブ。武闘大会の予選で出会った、この世界の数少ない知り合いの一人である。彼女もこの戦争に参加していたとは。

何度か殺し合った仲なので、彼女の實力はよく知っている。何とも心強く、同時に何かしでかされそうで不安だね。

エヴァの隣には、シスター服に身を包んだ狂信者・ソフィアさんもいた。彼女もエヴァと同じような経緯で知り合いになった人物である。おかしなセリフを撒き散らしながらモーニングスター

で相手を撲殺しまくる姿は、鮮烈な光景として記憶に焼き付いていた。とりあえず面倒そうなので、近付くのはやめておこう。

人数が増えたということもあって、あちこちで怒鳴り声や喧騒が巻き起こっていた。

まあ、気が立つてしまうのも仕方がない。

戦争は明日に迫っているのだから。

部屋の隅のソファで寛ぎつつ、喧騒を何となしに眺める。

（おまけに偽神の意志討伐もあるからね）

岩肌の目立つ天井を仰ぎ、愚痴の代わりに溜息を吐き出す。

血統団のそもその目的は偽神の意志を殺し、権能の呪いを解くことである。帝国軍の迎撃は、あくまでもその過程にある障害のようなものだ。

勇者たちに先を越されないようにしなければならない。

帝都下水道の下に広がる血統団の支配領域。蟻の巣のように入り組んだ地形は、迂闊に足を踏み入れれば二度と目を浴びることすら叶わない。

そして、偽神の意志が潜むのはそこからさらに下層となっている。詳細は不明だが、おそらくは最下層で待っているだろうとのこと。この辺りは実にボスらしくて分かりやすいな。

明日の動きを脳内でシミュレートしながら、俺は目を瞑った。

（別に敵討ちってわけじゃないけど……）

歴代の権能保有者の恨みは、俺がきつちりと晴らしてやる。

俺が最後の偽神となり、この連鎖に終止符を打つのだ。帝国を敵に回すことになるので、世間的には大犯罪者では済まない存在となるが、今となってはどうでもいい話である。

いくら「トクメー」が悪名を轟かせようが、「ミササギ」には関係ないのだから。

（まあ、国外逃亡も視野に入れておくか）

派手にやらかすことを考えたら、この国での旅も潮時かもしれない。最初に転生した場所であつたというだけで、この国にこだわる理由なんて一切ないし。

どうせなら色々な国の観光なんかもしてみたい。ただひたすら食道楽に徹するというのも面白そうだ。

そうと決まれば、こんな地下で死んではいけないな。

今後の楽しみのためにも頑張らなければ。

俺が気合いを入れ直していると、部屋の入り口付近がにわかに騒ぎ始めた。

「おっ、来たかな」

団員たちが騒然とする中、俺は静かに微笑みを漏らす。

どうやらこの区画に持ち込む予定だった兵器が到着したようだ。

地響きを起こしながら部屋に入ってきた大群を、遠くから眺める。

その光景は、混沌そのものだった。

「おー、邪魔邪魔ー。道開けろー」

「うわっ、このスペース狭くないか？」

「お前らはこっちで待機しとけよー」

まず最初に入室してきたのは、好き勝手に喋る大勢のトクメーたち——俺が権能を使って少しずつ増やした分身体だ。分身体は所有能力（所有能力）を除いた俺の能力を扱うことができ、知識や経験といった部分も継承している。細かな性格の差異や能力の優劣はあるが、非常に便利な駒と言えるだろう。そんな彼らに続いて、後続の軍団もやってきた。

爆弾を埋め込まれたゾンビとスケルトンの群れ。

人体実験の繰り返しによって強化された子飼いの奴隷たち。

巨大火器を背負った数十体のオリハルコンゴーレム。

様々な禍々（まがまが）しいオーラを放つ魔改造済みの戦闘ヘリや戦車。

全長十メートル超えの殺戮用人型ロボット。

改めて見回してみても、なかなか凄まじいラインナップだ。

俺が感心している間にも、他の兵器が次々と室内へと運び込まれてくる。現在移送されている分はあくまでも一部。全体量と比較すればごく僅かではない。団員たちにはこれらを指示通りの場所に配置してもらう。

「うん、いいね」

分身と団員たちの奮闘ぶりを尻目に、腕を組んで頷く。

明日はこいつらがフル稼働で帝国軍を蹂躪する予定だ。もちろん俺や分身、団員たちも目的のために奔走する。

血統団の戦力に対して、あちらさんはどんな反応を見せてくれるのだろう。想像するだけで今から楽しみである。

ロングコートを翻しながら、俺は喉を鳴らして笑った。



いよいよ訪れた宴の日。俺とアンネは、とある部屋で寛いでいた。

テーブルには様々な料理が並べられ、スピーカーから流れる音楽が室内を満たしている。空調が効いているので、地中であることを忘れてしまうほど快適だ。部屋の設備を整えるのに少し手間を掛けた甲斐があったよ。

近くにあった刺身をつまみつつ、俺は存分に体の疲れを癒す。

「あの、偽神サマ……」

くるくるとワークチェアに座りながら回転していると、半ば呆れたような視線をアンネから向けられた。先ほどからソファでそわそわしているのは、緊張感だけが原因ではないようだ。

アンネの内心を察した上でクスクスと笑い、俺はわざととぼけてみせる。

「ん？ 何だ」

「団長ならもっと率先して動くべきじゃない？」

そう言っただけアンネは室内をぐるりと見回す。四方の壁は無数のモニターで埋め尽くされ、それら一つひとつには地下空間の映像が映し出されていた。武装した団員たちが帝国軍の到来を待つ姿がよく見える。階層によって迎撃方法は異なるものの、どこも準備万端といった様相を呈していた。

（いいね、全体の状況を一望できるのは便利だ）

俺は腕組みをして満足げに頷く。有線どこまで繋げるのは苦労したが、各階層に複数の監視カメラを設置したのは正解だった。接続用のケーブルも魔法金属でコーティングした状態で天井を這わせているので、滅多なことでは壊れない。まさに監視室と呼ぶに相応しい設備をこの部屋は有している。

「他の団員が戦おうっていう時に、偽神サマだけが食事をしているだなんておかしいと思うの。いくらなんでも油断しすぎでしょう？」

俺がこの部屋の有用性について考えている間にも、アンネの主張は続く。

要は「前線で派手に戦うか、ボスらしい佇まいで待機してほしい」そうだ。まったく、細かいことには拘らない性格かと思っていたが、こういうところに関しては几帳面らしいね。いや、もしかするとサラ辺りから秘密裏に指示されているのかもしれない。

アンネの熱弁を聞き流しながら、俺は切り分けたピザを口に運んだ。

「はあ……偽神サマって本当に自由気ままよね」

「これでもちゃんと構成を考えているのさ。悪いけど団長らしさってやつは、私ではなく分身たちに期待してほしいかな」

溜息を吐き出すアンネに苦笑しながら、俺は再びモニターに視線を移す。

目を凝らせば、ほとんどの映像にトクメーが確認できた。言わずもがな、俺の権能で生み出した分身である。混戦が予想される今回の戦争において、彼らの存在は大きい。分身は数人単位で各階層に分けてあるから、不測の事態が起きようとも上手く対処してくれるはずだ。

頼もしい駒の様子を眺めながら、俺は缶ジュースに手を伸ばす。

「まあ、体裁よりも目的の達成を優先しないとね。これから大変な仕事があるんだから、今のうちに休んでおいて……おっと、敵さんのお出ましみたいだ」

まだ複雑そうな顔をしているアンネを宥めていると、モニターの一つに変化が起きた。

画面端からぞろぞろと帝国軍らしき集団が雪崩れ込んできたのだ。

間髪容れずに放たれた矢や魔法が、血統団側に降り注ぐ。監視カメラのアングルの全体は見えないものの、相手がかかなりの規模で攻めているのは理解できた。なるほど、あれなら細かい連携なんて関係ないだろうからな。即席で集めた冒険者も合わせた先制攻撃としては上出来か。

画面の向こうで始まった戦争を横目に、椅子から立ち上がる。浅層が接敵したのなら、俺もそろ

そろ動くべきだ。残念ながら怠惰に過ごせるのもここまでらしい。

椅子の背もたれに掛けてあったロングコートを羽織り、アンネの肩を叩く。

「ほら、せっかくの宴なんだ。思う存分に楽しもうぜ」

「そうやって笑える偽神サマが羨ましいわ……」

呆れ返りつつも、準備を整えているアンネは偉いと思う。普段の軽いノリとは裏腹に、なんだかんだで真面目な性格のようだ。

監視室で待機させておく分の分身を生み出してから、俺たちは部屋を後にした。ここからは互いすべきことがあるので、アンネともお別れである。

「それじゃあ、頑張れよ。くれぐれも例の仕事はしくじらないように」

「任せときなさいって。ちゃちゃつとこなして、戦線に向いてあげるから」

「へえ、言うようになったじゃないか」

最後に軽口を言い合い、俺たちはそれぞれ違う通路を進んでいく。

ここからはいつどこが戦場になるか分からない。気を引き締めておかないと、不意を突かれそう。もちろん相応の対策はしているものの、警戒するに越したことはない。この機を狙って偽神の意志が紛れ込んでくる可能性もあるからね。

そんなことを考えながら、俺はナイフを片手に歩く。

(次に寝られるのはいつになるのかな……)

最近は徹夜が多いので、まとまった睡眠を取りたいものである。

まあ、それが永眠とならないように気を付けなければ。



岩肌の目立つ暗い通路。あちこちから響いてくる戦闘音をBGMに、俺は目的の場所を目指す。

こうしている間にも無数の命が散っては生き返っているのだろう。方法は違えども、団員と帝国軍はどちらも不死の力を獲得している。さぞ凄惨な殺し合いに発展しているんじゃないかな。

耳を澄ませながら歩いていると、少し先の曲がり角に人影が見えた。

「見送るか？ こんな時まで徹底するとはさすがだね」

「本来ならば偽神様に同行したいくらいです」

咄嗟に構えたナイフを下ろし、俺は優雅に礼をするサラに話しかける。

彼女はわざわざ俺に挨拶をするためだけに戦線から抜けてきたようだ。そんな暇があるのなら一人でも多くの帝国軍を仕留めてほしいのだが、本音は一応呑み込んでおく。今更文句を言っても意味はないし、彼女なりの忠誠心を否定するのは良くないだろうからね。

立ち止まるのもなんなので、そのままサラを連れて通路を進む。ある程度会話をして満足したら、現場に戻ってくれると思いたい。

立ち読みサンプル はここまで

「それで、戦況はどんな感じかな？」

「私の知っている限りでは順調です。そこからも確認できますよ」

俺の問いかけに対し、サラはそっと前方を指差す。

そこは右側の壁の一部が削られ、隣接する大部屋が覗けるようになっていた。先ほどからやけにうるさいと思ったら、そこから音が聞こえていたらしい。

さっそく近付き、室内の様子を覗いてみた。

（んー、いいね。ちゃんと殺れてるじゃないか）

オリハルコンゴーレムが重火器を乱射しながら突進し、帝国軍を蹴散らす。圧倒的な防御力の前では、少々斬撃や魔法などは掠り傷にすらならない。全身鎧を着た屈強な兵士があっけなく吹き飛ばされていた。

力任せに切り開かれた隙間に身を捻じ込ませるのは、大量のアンデッド。持ち前のタフネスさを駆使して強引に接近し、致命傷を食らえば自爆する。もちろん無抵抗な相手にも容赦なく襲いかかるので、なお性質が悪い。たとえ魔法の嵐が直撃しようとも、彼らは本能のままに歩を進める。俺が見ている間にも、帝国軍の防衛陣営を数の力で押し潰そうとしていた。

（ああ、ここで本隊が切り込むって寸法ね）

そうして帝国軍を弱らせたところで、ようやく団員たちが登場する。

先ほどから遠距離からペチペチと地味な攻撃ばかりしているなと思ったら、この時を待っていた

ようだ。実に堅実で手際のよいやり方を選んでいる。分身が入れ知恵をしていたおかげかな。

指導の成果が出ていることに内心でほくそ笑む。

銃火器を携えた団員たちは、にじり寄るようにして攻め立てていた。彼らの射撃によって帝国軍は次々と斃れてゆく。ゴーレム、ゾンビと続いて銃火器の一方的な制圧。帝国軍にまともに反撃できる術などあるはずがない。やはりアシュリーさんの主張は採み消されてしまったみたいだね、かわいそうに。

蹂躪される帝国軍を見下ろしながら、俺は口角を吊り上げた。

「どうやらヘビーペッパーの役目はなさそうですね」

「予備戦力だからそれでいいのさ。使わないに越したことはない」

隣にいたサラの呟きに、俺は淡々と答える。

ヘビーペッパーというのは、俺が作製した殺戮兵器の一つだ。この地下空間の中で比較的広いスペースを持つ階層には必ず設置してある。この大部屋も例外ではなく、血統団陣営の中央に鎮座しているのが確認できた。

ヘビーペッパーの外見を表現するなら、「SFチックな人型ロボット」という言葉が相応しい。無駄な装飾のないスリムなフォルムは実用性を重視したため。こいつ一体だけでオリハルコンゴーレム十数体をスクラップにできる。

要はチート性能の兵器が奥の手に残っているということだ。はてさて、帝国軍はどれだけのへ